

結草

kusamusubi

No.34

Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2021.11.01

人として生まれてきたという人と

道因寺住職

相馬 豊

只今ご紹介いただきました白山市相川町にあります道因寺とお寺の住職をしております相馬豊と申します。昨日に引き続き本日もどうぞよろしくお願いいたします。

浄光寺さんの本年度の報恩講、先ほど勤行が無事に終わった訳ですが、親鸞聖人の遺徳を偲ぶことだけではなくて、現代という時代を生きている私達一人一人が、その生き方という事を通して、もう一度自分の生き方や在り方を親鸞聖人の生涯に訪ねていく。そういう歩みの中で日頃忘れていた事、あるいは

見落としていた事、そのことを改めて確認していくことが私たちがこの報恩講を勤めていくという事柄ではないかといいただいております。

人に生まれてきた

その意味で私達が一番見失っているのは、「人に生まれてきた」ということ。このことを私達はいつの間にか問わなくなりました。訪ねなくなりました。何かいつの間にか生まれてきたことが当たり前のように思っている。

たその事を通して当然だと思っ

ている。
そして「人に生まれてきた」という事は、もう一つ悲しいものを背負って生きてきているという事です。生まれてきたというのは、単に人に生まれてきたわけではなくて、死すべき者として生まれてきたという事実も抱えております。でも実際には、我が子や孫やひ孫の誕生を見ると、生まれてきたことの喜び、そちらの方に目がいつてしまつて、なかなかこの死すべき者としての捉え方が出来ません。

9月29日に亡くなられました、ソプラノ歌手の佐藤しのぶさんという方がおられました。その佐藤さんが自叙伝を書かれました。そのエッセイの中で佐藤さんが我が子の誕生を通して語られた言葉が非常に印象的でした。「新しいお命が誕生したその瞬間、私は確実に亡くなつていくことを悟りました」とこういう言葉が綴られていました。新しい我が子の誕生のお命を見た瞬間、確実に私は死んでいくという事を

悟りました。こういうお言葉がですね、佐藤しのぶさんのエッセイに書かれていました。どうでしょうかね、私達は新しい命の誕生を見た瞬間、嬉しいで一杯です。お母さんとなった方は、体は疲れているけれど、本当に嬉しい。しかし佐藤さんは、それを見た瞬間、確実に私は亡くなつていくと悟つたと。

佐藤さんは別にそんなに深く仏教を学んでおられる方とは思えません。しかし、人間の事実という事をきちんとして捉えているなど。私達にとつて一番会いたくない、見たくない事実、死すべき者として生まれてきたという事を我が子の誕生の瞬間に確実に私は亡くなつていくと悟つたと。何かそこに生まれてきたという事は、ただ単に生まれてきたというわけではなくて、悲しい痛みを持っている。

その一つは死すべき者が生まれて参りましたという事実です。そしてもう一つは、死すべき者であるけれど、その歩みの中で苦悩する存在であるということです。人に生まれ

てきたという事は、苦悩するためにも生まれてきたという事が言えるのではないのでしょうか。色んな苦悩に出会ってきて、会いたくない中でも出会って来た。

しかし、私達の捉えている苦悩というのは、ほとんどが外からくる苦悩ばかりを問題にしているのではないのでしょうか。人間関係で苦悩する、あるいは社会へ出て仕事上の苦悩であるとか、家族を通しての苦悩であるとか、何か苦勞というのには私に對して外から来るものだけを苦勞という風に私達は捉えますけれども、しかし苦悩は、根本的には外から来るものではなく生まれてきたということにもう苦悩が始まっている訳ですよね。生まれてきたという事実の中にその命の事実の中でどうしても会っていかなければならぬ苦悩というものがああります。それが老いていくということ、病になること、そして亡くなっていくということですね。

外から来る苦悩に對しては対策を練ったり、やりくりはできるのですが、自分のお命に對する苦悩は、い

くら知識や学力をもつてしても解決が出来ないということですね。具体的には親鸞聖人なら90歳、蓮如上人なら85歳。お釈迦様なら80歳。みんな時代は違うけれどそこにお命を終えていかれた。

今日は御満座という事で、「三朝浄土の大師等」というご和讃があつたかと思ひます。

三朝浄土の大師等

哀愍摂受したまいて

眞信心すすめしめ

定聚のくらいにいれしめよ

『正像末和讃』

親鸞聖人

インド、中国、日本の三朝の大師。『正信偈』の中にも出てまいります。龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空。この七人の方々の中で、親鸞聖人が実際にお会いしているのは、源空上人（法然上人）、このお方だけです。あとの六人については全く生まれ時代も違います。だから会っていないわけです。龍樹、天親

はインドの方です。曇鸞、道綽、善導は中国です。そうすると生まれた国も違い、民族も違う。そういう中国にあつてその七人が何を常に考え、そして歩み出したかという、苦悩というものを抱えながら生きていくという人間の在り様です。

生死出ずべき道

その在り様の中で、人間である事



をどう確かめていくか。その事を親鸞聖人のお言葉でお訪ねいたしますと、「生死出ずべき道」と。

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出でさせ給いて、後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、上人のわたらせ給わんとするには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思いまいらす身なればと、ようやくに人の申し候いし時も仰せ候

いしなり。

『惠信尼消息』

生死出ずべき道を訪ねていくと。「生死」というのは仏教で言う、「迷い」です。迷いの根本が生死と押さえられていきます。その生死出ずべき道を訪ねていく、問うていく、それが私達の人生そのものだと。

私達は死すべきものとして生まれ、また苦悩をする存在でもある。でも私達は、苦は嫌です。苦しいのは嫌だから何を求めるかと言えば楽を求めます。苦というものに出会えばそれを逃れようとして一生懸命に対処してなんとか楽の方へもっていかうとします。そして一つの問題が解決して少し落ち着いて楽になったと。楽になったと思つた瞬間にまた今度は思いもかけない自分を苦しめるものに出会っていく。またそれを乗り切つて楽になろうと方向へ歩み出してまた楽に手が届く。ところが我が身の事、あるいは家族の事でまた苦という所に戻ってくる。

そうすると私達の人生の今日まで

の歩みというのは常にこの苦↓楽↓苦↓楽をぐるぐる廻つて来ているだけではないでしょうか。よくよく今日までの自分の人生を振り返つてみると、どうも私達がしていることは苦を逃れて楽になる。でも楽になつたかと思つとまた次の苦が出てくる。またそれを乗り越えて楽になる。このことの連続の中でぐるぐるとも廻っているのではないでしょう。私達は一步もこの中から出ていない。つまりそのことが仏教の用語でいうと「流転」と言います。ここをぐるぐる、ぐるぐる廻っていると。そしてぐるぐる、ぐるぐる廻つていく中でそのお命を終えていく。そういう在り方。

一 休さんと蓮如さん

蓮如上人と同じ時代に生きられた、皆さんもよくご存知の一休禪師という方がおられます。とんちの一休さんというかたちで知られているのですけど、蓮如上人と同じ、室町時代の方です。その一休さんがこう

いう人間の在り方をですね、短い言葉でこう言い表しました。

世の中は起きて箱して寝て食つて後は死ぬるを待つばかりなり

一休宗純

こういうお言葉です。蓮如上人と同じ時代ですから520数年前に亡くなられた一休さん。何かその言葉

を今の私達が生きているこの時代に当てはめても同じことが言えるのではないのでしょうか。日々の生活、私達は何をしていますか。「起きて、箱して、寝て、食つて」、箱してという

のは排泄です。そして「後は死ぬるを待つばかりなり」と。そうでないでしょうかね。会社を定年退職して悠々自適になった。今まで家族に迷惑かけた。じゃあ一緒に海外旅行に行こうとか温泉に行こうとか、色んなかたちで家族に対して奉公する。しかし、その事だけで無我夢中になつていけば、後は死を待つばかり。

昨日申しましたように、自分が何を

らなくなっている。その事を一休さんは時代は違うけれども今の私達と同じような感覚ではないでしょうか。「起きて箱して寝て食つて後は死ぬるを待つばかりなり」と。

私達が人に生まれてきたというのはただ死を待つばかりの人生なのでしょう。しかし、その人生を振り返つてみると、どうも私達はこの間でぐるぐる、ぐるぐる廻っている。

その事を蓮如上人は『御文』、四帖目四通の冒頭ですけど、こういう言葉で語りかけられています。

それ、秋もさり春もさりて、年月をおくること、昨日もすぎ今日もすぐ。いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえず、しらざりき。

『御文』第四帖四通

蓮如上人

どういう意味かと申しますと、去年の秋も過ぎてしまい、今年の春も過ぎてしまいましたと。そうですね、私達も一年あつという間に過ぎ

ていく。春の桜の綺麗な時節はもう終わって、今はもう、秋の紅葉が始まりだしている。月日が流れるように私達も四季を通して生き続けてきたけど、いつの間にかこの歳になつてしまった。季節が流れるのと同じ様に私自身もこの年齢になつてしまいました。そして昨日という日はとうに過ぎ去って今日も終わろうとしています。今日もです。もうお昼を過ぎています。あと半日しかないわけです。あつという間に終わっていく。

その間、色んな出来事に出会つてきたけれど、蓮如上人曰く、ほとんど何を言ってきたのか、何を語ってきたのか覚えておりません。また何を言われたのかも知りません。ただ分かることは老い、白髪になる身になりました。

この蓮如上人の『御文』も時代が違っていますけど、人間の存在の在り方は全然変わっていないのでないでしょうか。科学技術の進歩や医療技術の進歩は、私達に新しい生活を生み出してくれたけれど、人間の存在そのものが抱えている問題の根本はずっと同じところを流れているので

はないでしょうか。

ちよつと余談になりますけれど、私は今年62歳になります。小学校の時にですね、お寺のある在所で今の私と同じような歳の方がですね、学校の通学路に着物を着て立っているのを見て、なんて爺臭い人が立っているんだらうなどと、小学生の時に思いました。ところが、いま自分がその年齢になつてみて、朝小学生が通う通学路に立っていると、今の小学生も同じことを感じているのではなにかと思うんです。子供の頃は自分がそんなに歳がいくとは思わなかつたです。気がつけば、あつという間にこの歳になつていた。気持ちはいけれども、身体は正直です。もうあちこちにガタがきています。やっぱり歳を老いていくという事です。逃れたい事実です。どういう風にしても逃れられないです。

人間の深さ

昨日でしたかね、ちよつとテレビ

を見ていたらコマーシャルが流れました。女性の方にこんな言い方して大変申し訳ないですけど、そのコマーシャルの中で、この方の年齢はいくつに見えますか？というのをやっているんですね。そしたら色々な方がですね、その女性に対して40代ですとか、50代ですと答えられて、実年齢を公表するとみんな驚いているんですよ。そういう風にしてこのコマーシャルを見ていた時、なんかおかしいな、と。いつまでも若く見せようとする傾向が強くなって、そういう風にしていくことが本当に大事な事なのかなと。

人間の深さとはそういう事ではなんでしょう。自分がこの人生を歩んできた中で、色んな出来事と出会ってきた、そこに人間の深みというものがあつたのに、この方の年齢はいくつに見えますか？という問いは何かおかしいな。これは女性の方向に大変申し訳ないです。やっぱり何か私達はいつまでも若くありたいというわけですよ。自分が歳いったという事が認められないんですよ。で

も事実は事実なのです。その事実の中で自分がその事実とどう向き合つて、その事とどう真向きになつていくか。そして今一度、自分の人生を振り返る。その前には立ち止まる事がなければなりません。一旦ここで立ち止まるという事です。そして振り返ってみる。誕生してから今日までの歩みをもう一度立ち止まってみる。振り返ってみる。そしたら色々なものが見えてくると思います。そして振り返ってみて、改めてそこに止まり、振り返り、聞くという事が今一番大事な事ではないでしょうか。しかし、この立ち止まることや、振り返ることは現代という時代の中では許されません。

今日も車でこちらに来たんですけど、交差点で赤信号で止まったんですね。ちよつと目を離したら信号が青に変わっていたんですね。私、気づかなかつたんです。後ろにもう一台車が止まっています、その車からクラクションを鳴らされました。ブーと。ぱつとみたら青信号だった

んですね。それで急いで交差点を右折してきたんですけど、クラクション鳴らすということはよっぽど早く行きたい事情があるのかなと。こんなところでノロノロと立ち止まるなど。迷惑だと。だから時代から言えば立ち止まる事は許されません。早く行けという事です。それから振り返る事も許されないのでは無いでしょうか。

聞くという事

んですけど、立ち止まる事もダメ、自分の人生を振り返って後悔の念があるからこそ、これからどう生きようかと考えようとした時、そんなことはもう過ぎ去った事やと、前向いていきなさいと。

す び

今年、久しぶりに中学三年生の時の同窓会がありました。何年振りかにその同窓会に出て色んな話をしたわけです。今この年齢になって色んな事を振り返ってみると、あの時ああしておけばよかったなど色んな後悔することがいっぱいあるんですけど。お酒の勢いもあるんですけど、同級生にこんな事言われました。相馬、いつまでそんな過ぎ去った過去の事をくどくど、くどくど言ってるんやと。そんなこと考えないで前を見ていけやと。まだ若いんやからと。もつと前向いていかなダメやと。ちよつとその言葉に私は首傾げました。そう言われるとそうかと思った

聞くという事、これも現代出来な

いのではないでしょう。特にこういう大きなことについてはなかなか聞くことが出来ないのではないのでしょうか。皆さんもどうでしょう、もし家で家族団欒している時に、何で私は生まれてきたのでしょうか？と聞かれたらどうします？昨日お話をさせていただきましたが、一人のご家族がお寺に飛んできて「何で僕を産んだんや」、という事を突然言われた。どうしたらいいんやろう。そしてその話を聞いた後、息子さんと少し時間を持って話をしたわけですが、そうするとやはり「何で僕を産んだんや」というのには背景があるわけです。親には自分の事を心配

させたくないから、言えないからついつい「何で僕を産んだや」、こう言ってしまったけど、学校でいじめにあっている。学校にはもう行きたくない。友達関係も部活も嫌になつてきたと。だから自分の人生に対してもう諦めよう。その時ついつい親に向かって「何で僕を産んだんや」と。何で僕はこのように苦しまなければならぬんやと。そういうことをその息子さんと時間をとって話すうちに気づきました。みんな生きていく事に苦悩しているんです。みんな精一杯生きていくのだけど、その事実がなかなか相手に伝わらない。そして自分だけ苦悩しなければならぬ。

これは昨日の夕方ですけど、テレビを見ていたらまた衝撃的なニュースが流れました。9月までに自ら命を絶った小学生、中学生が325人と言いました。これだけおられるんです。急増しているそうです。多くの方が夏休みが終わった時に命を絶っている。みんなに生まれてきて死すべきものとして苦悩して生き

ている。このことに私達が気づけば、またここに聞くという事があればお互いを大事にしていく関係が築けるのではないのでしょうか。誰もが死すべきものです。同時にみんな生きる事に苦悩している存在ですよ。その事に一人一人が目を向け、そしてそのことをお互いに確認し合うという交わり、言葉掛け、対話をし、このことを課題にして、改めて生まれてきたことを考えてみる。そういう聞くという事もなかなかできない状態。みんな自己主張はするけれども、なかなか一つの事を確かめて聞くという事は出来ない。立ち止まったり、振り返ったり、聞くことが出来ない。私達の今の時代ではないでしょうか。

終活

そういう時代の中にあつてもう一度生まれてきたことはどういう事なのか。その事を私達に問いかけて下さった方がいます。その方は落語家です。昨年7月2日に亡く

なった落語家、皆さんよくご存知の落語家です。桂歌丸さんです。古典落語の名手として活躍され、昨年その生涯を終えていかれました。この桂歌丸さんがですね、現代に生きている私達に問題を提起されました。それは人生の仕舞い方ということです。こういう事を提起されました。

人生の仕舞い方といえば、今、世

間では一つのブームを呼んでいます。終活です。後々自分がそのお命を終えていく準備としての終活です。その終活という事を言った時に考えるのが、まずは葬儀をどうするかということ。葬儀に必要な自分の遺影をどうするか。お墓をどうするか。自分が死んだ後、遺産相続の争いが起こると困るから遺書をきちんと書いておく。こういう形で終活をするのが世間ではブームです。テレビの葬儀屋さんのコマーシャルをみてもそうですね。葬儀屋さんも色々なコマーシャルを流しています。そうすると、私達もそういうコマーシャルの影響も受けますからやはり考えない事はないですね。自分も

そろそろ終活という事で考えなければいけないかなど。お預かりしているご門徒さんのなかでも遺影の事は言われますね。どの写真使おうかな、一度見てくれんかと何人もの方に言われます。そして葬儀についても家族葬にしたらいいかなと相談を受けます。そろそろこの終活というのが身近な存在になってきているのだなと思います。

ところが桂歌丸さんは私達の言う終活についてここで一つの定義をくれたのです。世間一般では終活というのが大変なブームを呼んでいる。その終活と私の考える終活はちよつと違いますよ。人は皆亡くなっていきました。死すべきものです。そして、その亡くなっていく在り様は、十人十色。同じ人は一人もいません。十人なら十人、亡くなっていく姿があります。じゃあその終活、亡くなつていくという事を考えたら、その亡くなるまでをどう生きていくのか考える、それが終活だと思っています。

そうすると世間一般でいう終活と桂歌丸さんが言う終活は全く違うので

しょう。世間はお墓をどうする、遺影をどうする、葬儀をどうする、遺産をどうする、そういう事ばかりだけど、桂歌丸さんはそういう事を終活というのではなくて、死を迎えるまでに自分がどう生きていくのか、それを考える。つまり人として自分の人生を終えていく、その人生を終えていくという事を、自分はどう生きていくのか、そのことをもう一度考える事が終活ですよ。こういう言葉で語り掛けました。

頼む

そして、その考えていくという時に一つの大事な事を歌丸さんが言われました。みんな亡くなっていく人は言葉を残すのだと。言葉を残していくんですよと。そして桂歌丸さん、やっぱり言葉を聞いたんですね。同じ年代を生きた落語家の円楽さん。円楽さんが亡くなる前に電話を一本掛けてきて、歌丸さんに言った言葉が「頼む」という一言。亡くなられた後、「頼む」と言われたが、このこ

とは何のことかなど。落語協会の事、落語の事、色々なことを考えたけれど、「頼む」と言われたのは自分の事だと。落語家として自分の人生をどう歩んで来たのか、それを「頼む」と押さえられた。

実はその事と関係するのですが、今年の6月25日に私の父が亡くなったんですね。老衰で目を閉じてい



たのですけど、亡くなる二週間前から介護施設の中でずっと寝たままでした。亡くなる一か月前から食事も摂れなくなつたので、水分だけでした。点滴の水分一滴が落ちるのがゆっくりで長いのですけど、それだけで一か月、お命を保てました。亡くなる二週間前からずっとベッドで寝ていました。

その中で亡くなつていく三日前に、妻が寝ている父親にこんな事を言つたんです。「お父さん、最後に残す言葉、何かないですか？」と耳元で大きな声で。そしたら父親がずっと寝ていたはずなのにぱっと目を開けたんです。声に反応して。そして細かい声で言いました。やっぱり円楽さんと同じような事です。「あと頼む」と。細かい声で。この一言を言つてまた眠りにつきました。その言葉を聞いた時は何も思わなかつたんです。そして家帰ってから父親が言った「あと頼む」って何かと気になつていたんですね。

そして25日に亡くなって、茶毘に付し白骨となって葬儀に纏わるすべての事が終わって、白骨を抱いて家

の本堂に帰ってきた。そして骨壺を法名前に据えて、そして父の事を思つていた時にはつと解つた。「あと頼む」と、どういう事を父が私に言おうとしたのか。

「あと頼む」というのは、私は道因寺の住職ですから道因寺を頼む、お預かりしているご門徒を頼む、こういう面もあると思うんです。でも父が本当に言いたかつたことは、私にはこういうふうには聞かえませんでした。道因寺の住職を頼む、ご門徒を頼む、という事ではなくて、あなたが本当にお念仏の教えに生きる人になれよ、あと頼むと。その時改めて今まで気が付かなかつたけれども、私達一人一人は亡き方から使命を受けとるんやということ。使命です。受け継ぎ伝えられてきたものを大切に守つて次の方に手渡していく。そのことを使命として生きていくという事です。私達はただ生まれてきて、苦悩して死すべきものだけれど、そこには使命を果たしていくという人生もある。受け継ぎ伝えられてきて、そしてそのことを今度は自分が自分の人生を生きる使命として歩いて

くという事です。それが私の場合、父が「あと頼む」と。

私は今までそんなことに気付かなかつたです。住職になつて十七年経っています。住職になつて十七年経っているんですけど、全くそんな事は気付かなかつた。前住職である父が亡くなつていった時、改めてその歩みを振り返つてみたら、色んなものに出会いながら、その人生の中で受け継ぎ伝えられてきたものを自分の生涯をかけて歩いていった。そして、亡くなる三日前に「あと頼む」と。頼むという事は、託したという事でしょう。後はお前に託したよ。託された中身です。それは生き方です。自分が人としてどう生きていくかという生き方を頼まれたのです。生き方の問題です。生き方とは一つは方向です。どの方向に向いて歩いていくのかという事です。それとも一つは態度です。どういう態度で歩んでいくのか。その方向と態度をしっかりと持つてよという事です。

住職になつて十七年ですけど、住

職を譲つたといつても前住職の父の姿がありますから、分からない事は聞けばいいかなと、どこか油断があるわけです。余裕があるのです。でもその方がいなくなつた時、その残した言葉を振り返つた時、改めて何を問いかけられたかという生き方です。人として生まれてきて、あなたはどんな生き方をするのですか。どういう方向に向いて歩いていくのですか。いろんな出来事に出会つた時、どんな態度をとるのですか、ということ。そうすると私達の方や態度を教えてください。誰かという、先にその道を歩んだ方です。先にその道を歩んだ方によつて教えられる。つまり私で言うなら父もそうですし、ご門徒さんもそうです。その一人一人が諸仏です。私にとつて有縁の方々、諸仏です。

事実と真向きになる

親鸞聖人がその九十年を通して何を大事にされていったのか。いろんなことがあつた時、その時にどう

いった態度をとるのか決定する時、親鸞聖人はまさに声を聞いていくわけでしょう。その教えの声を通して自分の在り方を確認していく。そうすると色んなものが見えてきましたと。ひとつが私達は煩惱具足の凡夫である。と。どれだけでも煩惱というものは払えない。苦悩を抱えながら生き続ける者よ。苦悩から逃れるのではなく苦悩そのものを生きる者よ。そういう声と出会っていった。私達はどこまでいっても煩惱、只人ですよ。だから親鸞聖人は愚禿釋親鸞と名のられた。愚というのは愚かという事を表したのではなく、愚かということは漢字は愚かですけど、これは只人だという事でしょう。只人の証を愚とされた。

私の中には嫉む心、僻む心、妬む心、色んな物差しで人を見るという眼もあるし、色んな煩惱も抱えているし、そういう只人であるという事を人が教えてくれました。その事実に真向きになっていきなさいよ。そして人として生まれて生きるという事を問うて下さいよ。そういう

生き方を私達は歩もうとしているのではないのでしょうか。人として生まれて、あなたはこういう生き方をしていますか。生き方だから誰かがこうしなさいという事ではないのです。自分で見つけていくということ。色んな生き方がある。それは様々です。しかし、一番大事にして欲しいのは、人として生まれてきたという一点を外さないで下さいという事ではないでしょうか。人として生まれてきたという一点をどうか外さないで歩んで下さい。なぜならば死すべきものであると同時に、苦悩をしながら生きなければならぬからです。その一点を確かめながら自分の確かな歩みを続けて欲しいと。

歌丸さんが言われたように終活というのとは何か準備する活動ではなくて、どう生きていくのかを考えると、どう生きていくのかをみんな言葉を残していきます。その言葉によつて自分の方向、態度が教えられますよ。歌丸さんは円樂さんからの「頼む」という一言が考えるきっかけになった。私の場合は、父が「あと

頼む」と亡くなる三日前に何気なく言った言葉。よくよく考えたら使命です。その使命を果たしていく。自分が人間として生まれ、本当にお念仏の教えを聞いていける人になってくれよという願い掛けの言葉です。

そうすると自分の今までの在り方がどうだったかな。いかに雑に生きていたかです。雑に生きていたなど。でもその雑という事が見えたのは父の残した言葉によつてです。こういう言葉に出会わないと自分を振り返りませんから。振り返って初めてなんと自分は雑な生き方をしていたのだなど、雑さが見えてきた。それはまさに言葉を通してです。こういう言葉に出会う事を通して今一番忘れられてきている、立ち止まったり振り返ったり聴くという事がもう一度始まっていく。そこに私達一人一人が尊い人生を歩んでいく、一つの方向が言葉として伝えられてきているのではないのでしょうか。そういう出会いがこの報恩講という二日間であらめられたのではないのでしょうか。本日はどうもありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は令和元年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「除夜の鐘」

日・令和三年大晦日
時・午後十一時半

「修正会」

日・令和四年元旦
時・午前零時

※「除夜の鐘」に引き続き「修正会」をお勤めします。

「きこまいけ」(当寺聞法会)

毎月二十八日・午後二時

※十二月～二月は冬休みみんなで『正信偈』に学んでいます。みなさまのご参加をお待ちしております。お気軽にどうぞ。



WEB サイト